

少年メッセージ 2025

～ 西牟婁地方作品集 ～



西牟婁地方青少年育成市町民会議連絡協議会

は じ め に

平素は青少年健全育成活動にご理解とご支援を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、(公社)和歌山県青少年育成協会が主催する「少年メッセージ2025」に、今年度は田辺・西牟婁地方の中学校15校から875点の応募をいただき、8月2日にホテル浦島において開催された県審査会の結果、入賞2点を受賞しました。

応募をいただきました生徒の皆さんと、ご指導下さいました先生方に改めて感謝申し上げます。

今回の応募には、学校や部活動、家族のことなど、普段の生活から感じたことや考えたことを素直に表現したものから、日本語のうつくしさに触れたもの、AIについて触れたものや自然や伝統文化に触れたもの、その他ユニークなテーマや主張のものがありました。

入賞となった2名の作品を紹介します。

徳田さんは、自分の悲しい過去と向き合い、立ち直った経験について思いを述べています。何気ない日常、変わらず毎日が来るということは「当たり前」ではないということを訴えています。「今を大切に生きてほしい。身近な人に優しくしてほしい。できることがあるなら、今してほしい。」と、毎日の生活で後悔しないようにしてほしいという思いが伝わる作品です。

坂倉さんは、世の中の変化において、「不易流行」が大切ではないかと考えています。いつの時代でも変わらないものが「不易」、時代の流れによって変化するものが「流行」であり、身近な校則からその大切さを考えています。また自分自身がこれから成長していく過程で、自分の中の「不易」を持ち続け、時代や人との関わりの中で「流行」を柔軟に取り入れる姿勢を忘れないようにしたいという思いがよく伝わります。

中学生の皆さんの瑞々しい考えに触れることができ、うれしく思います。

本冊子には、当地方に応募いただいた作品の中から、和歌山県大会入賞作品2点、西牟婁地方金賞作品3点、西牟婁地方銀賞作品6点、西牟婁地方銅賞作品5点を掲載しています。中学生の思いあふれる作品に触れることで青少年に対する理解を深め、次代を担う健やかな青少年を育む社会創りの一助にいただければ幸いに存じます。

令和7年9月

西牟婁地方青少年育成市町民会議連絡協議会
会 長 上 羽 寛

目 次

【和歌山県大会入賞作品】

あなたと私の約束	日置中学校 2 年	徳田 蓮	…	1
変わる勇気、変わらぬ心	田辺中学校 3 年	坂倉 朱音	…	3

【西牟婁地方金賞作品】

二十歳になった僕へ	大塔中学校 1 年	太田 寛人	…	5
うつくしい日本語	三舞中学校 3 年	岡田 莉空	…	7
気分と態度	本宮中学校 3 年	和田 千夏	…	9

【西牟婁地方銀賞作品】

生きるということ	日置中学校 1 年	石田 一颯	…	1 1
普通ってなんですか？	中辺路中学校 2 年	平山 慈花	…	1 3
いじめを減らす関係づくり	大塔中学校 3 年	愛瀬 琉大朗	…	1 5
僕のヒーローたち	上富田中学校 2 年	梅本 剛志	…	1 7
春と蝶	富田中学校 1 年	湊 香乃	…	1 9
A I と仲良く共存したい	田辺中学校 2 年	坂本 理花	…	2 1

【西牟婁地方銅賞作品】

伝統や文化を守っていくには	高雄中学校 2 年	山本 大智	…	2 3
さがしもの	大塔中学校 3 年	渕上 桃苺	…	2 5
幸せってなんですか	白浜中学校 3 年	濱村 和音	…	2 7
「お母さんのありがたさ」	富田中学校 1 年	横井 勇信	…	2 9
「自分らしく、人とつながるために」	田辺中学校 1 年	小林 蒼依	…	3 1

あなたと私の約束

日置中学校 二年 徳田 蓮

私はこのメッセージを読んだすべての人に、一日一日を大切に、あることを意識して生活してほしいと思う。「あることを意識する」のあることとは、「身の周りの人がいる生活を過ごせるのは当たり前じゃない」ということだ。私が意識して生活してほしいと思ったのには理由がある。私が実際に体験して感じたこと、後悔したことからだ。

朝、まぶしい光で目を覚ます。

「はよおきよしよ。」

と母の声。着替えて、ご飯を食べて、学校に行く。友達と笑って、帰ってきて、テレビを見て、お風呂に入って、眠る。そんな毎日が当たり前だと思っていた。何も考え

ずに、同じように流れていく毎日。それが「普通」だと信じていた。でもそうじゃなかった。

私が小学校の低学年の頃、母が事故で突然帰らぬ人となった。前触れもなく、言葉も交わせないまま。朝、優しい笑顔で笑っていた母が、夜にはいなかった。まだ幼かった私は、ただ泣くことしかできなかった。頭の中は真っ白で、心だけがぼつかりと穴をあけたまま、時が止まった。

一日一日が、どれほど尊いものだったのか。

「また明日ね。」

と言えた毎日がどれほど幸せだったのか。私はその日から、ずっと後悔を背負って生きている。もっとありがとうと伝えたかった。

もっと優しくすればよかった。もっと、一緒に笑いたかった。もっと、もっと。もう届かない想いが、胸にあふれてとまらなかった。

母がいない日々は、息をするのもつらいほどだった。新しい環境、新しい日々、全部が、「母はもういない」という現実を突きつけてきた。苦しくて、寂しくて、逃げ出したくなった。

けれど、そんな私を支えてくれたのもまた、「人の優しさ」だった。友達の言葉、先生のまなざし、家族のぬくもり。私は、人と人とのつながりの中で少しずつ立ち直っていった。そして気づいた。失ってしまったからこそ、私は大切なことに気づけたのだと。

今、私は毎日を意識して生きている。「今日」という日を、もう二度と戻らない大切な一日だと思って。

隣にいる人の笑顔を、ちゃんと見ようと思う。「ありがとう」をちゃんと伝えようと思う。いつか突然、会えなくなってしまう日が来るかもしれないから。

私のように、あの日の自分を責めてほしくない。後悔に押しつぶされるような夜を、誰にも過ごしてほしくない。

い。

だから伝えたい。今を、大切に生きてほしい。身近な人に優しくしてほしい。できることがあるなら、今してほしい。「当たり前」は、永遠じゃないから。

このメッセージを読んでもくれたあなたが、少しでも「大切なもの」に目を向けてくれるなら、私は、それだけで救われる気がする。

「一日、一日を大切に。」あなたと私の、約束です。



変わる勇氣、変わらぬ心

田辺中学校 三年 坂倉 朱音

「不易流行」今の日本において、この言葉が大切なのではないかと考える。

不易流行とはいっても変化しない本質的なものを忘れない中にも、新しく変化を重ねているものを取り入れていくことである。私がこの言葉を知ったのは、生活指導の先生が校則について話している時だ。先生は

「校則には、変えてはならない不易の部分と、時代に合わせて変えていくべき流行の部分がある」。

と話していた。スマートフォン扱いなどは、時代の流れによって生まれた流行に合わせて考え直す必要があるけれど、制服の着こなしなどは、いつの時代でも変わらない不易だという。

この話を聞いた時、私は初めて「不易流行」という言葉の奥深さを感じた。これまで校則は「ただの決まりごと」だと思っていたけれど、その裏には、「どうすれば

社会の中でより良く生きていけるか」という問いがあると知ったからだ。同時に、これは校則だけでなく、私たちの社会全体に言えることだと思う。

たとえば、日本の伝統文化には「不易流行」の精神が色濃く表れている。茶道、歌舞伎、和食。どれも何百年という時を超えて受け継がれているが、全く同じ形で続いているわけではない。たとえば、和食は外国人観光客向けにベジタリアン用のメニューを用意したり、伝統的な調味料と現代的な食材を融合させたりする工夫が見られる。それでも四季を大切にしたり、素材の味を生かすという「和食の心」は変わっていない。

このように「変わらないもの」と「変わっていくもの」のバランスがとれているからこそ、日本の文化は今も世界に誇れるものとして存在しているのだと思う。

一方で、今の日本には「不易流行」のバランスが崩れてしまっているように感じる場面もある。たとえば、SNSの普及により、情報や価値感の「流行」が一瞬で広まり、次から次へと新しいものが求められている。便利さやスピードは確かに魅力的だけれど、それに振り回さ

れてしまい、「自分はどうしたいのか」「何を大切にしたいのか」といった、「不易」な部分を見失っている人も多いと思う。また、大人の社会でも「伝統を守る」という言葉が、変化を拒む言い訳になっているように見えることがある。働き方改革やジェンダー平等といった新しい価値観に対して、「昔からこうしてきたから」と耳をふさぐような姿勢は、本当の意味での「不易流行」とは言えない。

「不易流行」とは、ただ「変える」か「変えない」かを選ぶことではない。本当に大切なものは何かを見極めたうえで必要な変化を受け入れ、柔軟に対応していく。そのバランスこそが求められているのだ。

私自身、これから進学し、社会に出ていく中で、多くの選択を迫られることになると思う。その時、すぐに流されてしまわないように、自分の中にある「不易」を持ち続けたい。でも同時に、自分の考えだけに固執するのではなく、時代や人との関わりの中で「流行」を柔軟に取り入れる姿勢も忘れたくない。

今、日本は大きな変化の中にある。少子高齢化、テク

ノロジーの進化、価値観の多様化など。どれもが私たちに新しい対応を迫ってくる。だからこそ「不易流行」という言葉がこれまで以上に重要になってくるのではないだろうか。

変わらないものを大切にしながらも、変わっていくことを恐れない。そのバランスを意識しながら、私たちはこれからの社会をつくっていくかなければならない。

「不易流行」は、古くて新しい、日本人がこれからも大切にしていくべき考え方だと、私は思う。



二十歳になった僕へ

大塔中学校 一年 太田 寛人

二十歳になった僕、元気にしていますか？今どんな、生活をしていますか？

質問したいことは様々です。中学一年生の僕はまだまだ子供だけど、こうして未来の自分に向けて言葉を書くなんて、ちょっと不思議な気分です。

今の僕は、野球に夢中です。保育園の頃からキャッチボールが好きで、今は野球部に入って一生懸命練習しています。

少年野球の頃のポジションはピッチャー。マウンドに立つと、緊張もするけど、仲間や監督・コーチ、みんなの声が背中を押してくれて、思いつきボールを投げられるんです。でも、いつも上手くいくわけじゃなくて、試合で打たれて悔しい思いをしたり、コントロールが乱れて落ち込んだり、監督に怒られてショボーンってなる

日もあります。

だけど僕は、プロ野球選手になるのが夢です。テレビで活躍している選手を見て、「いつかあの舞台に立ちたい」と本気で思っています。

今はまだまだ遠く感じるけど、毎日の練習がその夢に少しでも近づくための大事な一歩だと思っています。二十歳の僕は、まだ野球を続けていますか？どんな仕事をしていますか？

プロになれなくなっちゃっていいんです。でも、野球が好きだった「今の僕」のことは、どうか忘れないでください。

学校生活では、勉強も頑張っています。中学生になると教科も増えて難しくなっちゃったけど、将来のためにちゃんとやらなきゃと思い頑張っています。友達とふざけあったり、時には喧嘩したりしながら、少しずつ成長している気がします。

二十歳になった僕は、どんな友達と過ごしているのだろう。今の友達と、今でも繋がっていたら嬉しいな。

家族のことも書いておきたいです。お父さんは、時々

キャッチボールの相手や、ゲームの話聞いてくれて、お母さんは毎朝、朝御飯を作ってくれたり、いろんなことをしてくれる。

家族って、当たり前にいる存在みたいだけど、いつもそばで支えてくれていることに、最近少しずつ気づいてきました。感謝の気持ちを持ち、ちゃんと言葉で伝えられるような大人になってください。

それから、これだけは言っておきたいです。未来がどんなふうになっても、僕は僕を信じているということ。悩んだり、壁にぶつかったり、逃げたくなる時もあると思います。でも、そんなときはこのメッセージを思い出してほしい。中学一年生の僕が、「二十歳の自分はきっと大丈夫」って信じていることを。

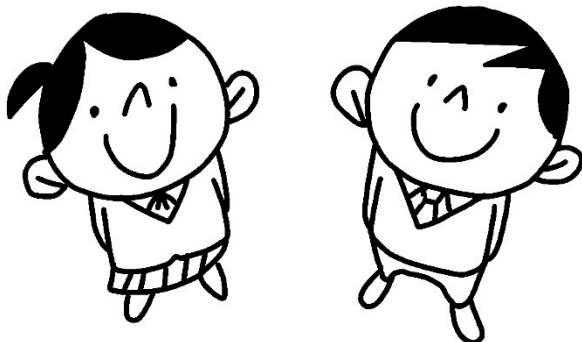
二十歳の僕へ。

夢をあきらめていても、形が変わっていてもいいです。だけど、頑張っていた過去の自分を、忘れないでほしい。頑張っていた時間は、ちゃんと意味があると信じています。

どうか、どんな道に進んでいても、自分のことを誇りに思えるような人生を歩んでください。

最後に、二十歳の「僕」頑張れよ！

大変なこといっぱいあると思うけど僕は僕の味方だぞ！自分を大切に、体調崩さないように頑張つてな！
中学一年生の僕より。



うつくしい日本語

三舞中学校 三年 岡田 莉空

みなさんは中三の国語の教科書に載っている一番最初の詩を知っていますか？「世界はうつくしいと」という詩で、どうせ塵になるのだから、たくさん「うつくしい」を言葉にしようと謳ったものです。

私はこの詩に感銘を受けました。私は日本語の豊富な語彙、多様な表現、曖昧さなど、日本語に魅力を感じます。同じ意味でもたくさんの言葉があったり、オノマトペの表現次第でいろんな感じ方ができたり、はっきりと言わないことでさまざまな解釈ができる、そんな日本語が好きです。私は漫画や児童書、純文学など、いろいろな本を読んでいて言葉に触れる機会が多いのですが、それぞれ読み手に伝える工夫をしていたり、知らない言葉がでてきたりして、読んでいて飽きないし、個性が出て

いて面白いです。小説家や漫画家は語彙力があって尊敬します。

ところで、最近は感情を表現するときに、「やばい」や「えぐい」など、便利な若者言葉を使いがちな傾向にあります。別に使ってはいけないということはありません。しかし、便利な言葉を使い続けることによって将来、日本人の語彙力が著しく低下するとともに、今ある日本語がどんどん姿を消していくのではないのでしょうか。とはいえ、私もよく若者言葉を使ってしまうし、

「そもそも若者言葉も日本語なのだからそれも残していきたい・・・。」

ともやもやしてしまいます。

したがって、私はここに提案します。便利な言葉が溢れているこの世のなかで、便利な言葉をできるだけ使わず、他の言葉で表してみませんか？例を挙げると、あなたの前に美しい海があったとします。その感想として、「陽の光が水面に反射して美しい」と言ったり、「えぐ

い」「やばい」などの言葉を使う場合は、「どこが、えぐい」「どんなふうによばい」など、主語と修飾語をしつかりと表して話したりすることです。こういう形容詞を言葉にして言うことは何となく気恥ずかしいような感じがすると思います。だから、私もよく若者言葉を使っています。

しかし、今一度考えてみると、語彙力がある人と、若者言葉をよく使う人、どちらのほうがいいでしょうか。私は、語彙力がある人のほうが良いと思います。特に、大人は語彙力があって損することはないと考えます。大人は仕事などで敬語を使う機会が増えるので、就職活動でも優位だと思うし、何より、印象が良いと思います。例えば、人と仕事をする機会があると、若者言葉をよく使う人より、豊富な語彙を違和感なく使っている人のほうが「この人は仕事ができそうだな」と感じますよね。やはり、言葉は大事なのだと思います。

私は、これからできるだけ若者言葉を使わないように

意識して会話していきたいと思います。先人が長く紡いできた日本語を、今度は私たちが後世に繋いでいく番です。どうせ塵になるなんて、そんなさみしいことは言わせません。この美しい日本語を、みんなで残していきたいませんか？



気分と態度

本宮中学校 三年 和田 千夏

私は今、どうしても書きたいことがある。それは、私を指導する周囲の大人たちの「気分」によって変わる態度についてだ。この「気分」が、私の心を、何度も戸惑わせた。時には切なさやうみだすことだってあった。

ある日、私を指導する大人は、機嫌がいいと感じられる時で、冗談を言い場を和ませてくれた。その時は、私も安心して素直にその場の雰囲気を楽しむことができた。しかし、別の日には、まるで別人のようにものすごく態度や口調が悪かった。このようなことが起こり、私は、指導する「大人」の「気分」によって、その態度や言葉がここまで変わること、初めて強い戸惑いを覚えました。なぜ、同じ行動に対して、こんなにも対応が異

なるのか。私自身、周囲の大人たちから「公平にあれ」「感情的になるのはよくない」などと教わります。それは、社会で生きていく上で大事なことでと理解はしています。しかし、その教えとは真逆の行動をしている大人。私は一体何を信じればよいのだろうか。私がおかをするたびに、その日の気分によって言動が全く違う。そして、その大人の気分次第で物事がすぐ変わる。このようなことが、私の学習意欲や、その大人への信頼感、そして他の大人へのイメージに、少なからずは影響を与えています。

私は、これから高校、大学、そして社会人になります。社会に出ていく私にとって、周囲の大人たちの言動は、社会のルールや人間関係を学ぶ上で非常に重要なことだと思います。だからこそ、この悩みを、周囲の大人はもちろん、多くの大人たちにも知ってほしいです。

このような出来事が重なると、自分自身のモチベーシ

ヨンも下がるし、大人の顔色を伺い、自己表現ができなくなります。それに、大人の顔色を伺うのは、とても大きな負担になります。大人の方も一度は経験があるのではないのでしょうか。ではなぜ、私たちを指導する周囲の大人たちは、感情によって態度が変わるのだろうか。私も、大人たちも人間だから、感情があるのは当然です。仕事で疲れていたり、個人的に悩みを抱えているかもしれない。それは人間である以上避けられない部分です。しかし、私たちを導く立場として、うまいこと感情をコントロールし、常に公平な対応をしてほしいと願っています。

私たちは、周囲の大人たちの背中を見て、社会でのルールや倫理を学んでいます。だからこそ、その大人たちの言動は、私たちにとって非常に重要なことになってきます。私が周囲の大人たちに望むことは、決して難しいことではないと思います。感情的になるのは仕方ないと

しても、それをぶつけるのではなく、一呼吸置いて冷静に対応してほしい。それだけのことです。

私自身、周囲の大人たちが嫌いなわけではないです。むしろ、尊敬し、信頼したいと思っています。だからこそ、私たちを、指導する大人の「気分」による態度の変化が、私の心を揺さぶることに、真剣に向き合ってほしいだけです。私と周囲の大人たちが、感情に左右されずに、より良い信頼関係を築けることを心から願っています。そしてこの作文が少しでも、より良い人間関係を築くきっかけになれば幸いです。



生きるということ

日置中学校 一年 石田 一颯

ぼくには百さいを超えたひいおばあちゃんがいます。実際は百二さいぐらいだと思います。なぜ、百二さいぐらいなのかというと、ひいおばあちゃんの誕生日がうるう年だからです。だからたまに、お父さんとお母さんが「ひいおばあちゃん、四年に一回しか誕生日が来んから二十五さいぐらいちゃう。」とじょう談で言っています。

二年ほど前まではひいおばあちゃんが息子であるべくのおじいちゃんの仕事を手伝っていました。足が不自由なので車イスに座って仏花のしきびの葉のそうじや枝の切り分けなどをしていました。それを見たぼくは、「とても元気だな。」と思いました。もう少し前の話だとぼくのお母さんがお父さんと結こんしたときはまだ一人で畑仕事をしていたそうです。

そんな元気なひいおばあちゃんだったのですが、ここ最近姿を見ることが減りました。その理由は認知症のような症状が出てきているからだろうと思います。この間夜にブザーが鳴ったのでぼくのお父さんがひいおばあちゃんの所へ行くと「家に帰りたいからおじいちゃんにむかえに来てほしい。」と言い出したそうです。その時にひいおばあちゃんはぼくのお父さんのことがわからなくなっていたそうです。お父さんが「ここが家やぞ。」と言っても「ちがう」と言いはって納得してくれませんでした。なのでおじいちゃんを呼んで説得してもらいました。

そのあとお父さんが帰って来たときに「自分のことを忘れられてとは思わなかった。」と少しショックを受けた顔をしていました。ぼくはそれを見て長く生きてくれるのはうれしいけど周りの人のことやいろんな思い出を忘れてしまったり、思い出せなくなるのはお互いに切なくなるような気がしました。ひいおばあちゃんも一人でみんなのことを忘れず思

い出せるように、がんばっています。そんなひいおばあちゃんを見ると、生きるということは決して楽なことではないと思います。その理由は、生きていると必ずいいこともあるけどその代わりに悪いこともあるからです。ほかに、たくさんの事にふれたり体験したりもします。いいことがあっても悪いことがあるのが生きるということだと思います。ぼくは運が悪いからいやなこととがたくさん起きます。けど運がわるくてもうまくいったり、楽しいことが起こります。でもこんなことを言う人がいるかもしれません。例えば、

「だったらずっと楽しいことが起こってほしい。」

でも、ぼくはずっと楽しいことが起こることなんてないし、生きるということが成り立たないと思います。その理由は、悪いことがあるからいいことが起こるからです。例えばゲームなどのバトルで負けたりするとくやしいですよ。ぼくも負けるとくやしいです。でも、「くやしいからもう負けたくない！」と思って練習し、努力し続けます。そして、努力し続けてからもう一回やってみ

ると、勝ててうれしくなります。このように、くやしかったりいやなことがあっても、少しでも努力すれば自分ばかりと自分に返ってきます。努力ではなくても、人に親切にしてよかったと思います。

このように、生きるということとはとても大変だけど大変なことだけではありません。ちゃんと楽しむ時間もあるから、ぼくもがんばってみたいと思いました。



普通ってなんですか？

中辺路中学校 二年 平山 慈花

「普通ってなんですか？」

この質問は私が心の中で思ったことです。

みなさんは普通とは何だと思いますか。世間では、普通はありふれたものや、他と異なる性質を持っていない、などの意味があるようです。確かに、「普通」という言葉で例文を作ると

「このペン普通だよね」

となります。

しかし、

「普通に考えるとこうだよね」

や

「あの人普通じゃないよね」

の「普通」はなんでしよう。意味は伝わりますが、私はこの

使い方は間違っていると思います。

人によってそれぞれの価値観があります。それは当たり前のことであり、個性です。個性は素晴らしい言葉です。いろんな人がいるから世の中は成り立っていると私の母が言っていたことがあります。「個性」に「普通」はありません。

同じように人に普通はないと私は思っています。国によっても普通は違います。日本とアメリカのあいさつでは、日本はおじぎでアメリカは握手などのフレンドリーな対応がとられます。これはごく一般的なことであり、普通です。私達は国の文化の違いを理解して、海外の人と接しています。国籍関係なく人と接するにあたって、人と自分との違いを理解して友達や家族、人生で関わっていく人達すべてと過ごしています。私も人に理解してもらい生きています。周りの人達には感謝しかありません。

私もみんなも「個性がある」から、人からの理解が必要になるのだと思います。

日本人はとくに普通にこだわって本当の自分を抑えがち

だと私は感じます。人によって普通の基準は違います。しかし、そもそも普通とは人生のストッパーになっているのではないかと考えるときがあります。もちろん、時によってストッパーも必要です。ですがストッパーをかける基準が低すぎると何もチャレンジできずに終わってしまうかもしれない。私はチャレンジできずに終わってしまったら損した気持ちになります。自分らしく生きるには、自分の普通を疑うことが大切だと思います。周りに合わせて過ごすことも大切ですが、自分の軸をしっかりとつことが一番大切だと思います。

出るくいは打たれる。ことわざで、出すぎると、周りから批判を受けてしまうことを意味します。では、打たれないために私達はどうすればいいのでしょうか。元野球選手のイチローさんは、こうおっしゃっていました。

「つきぬけたら良い。」

と。私はこれを聞いた時、衝撃を受けました。私は時々、周りの反応が気になって出すぎたまねはしないでおうと、

心の中で意識的に制御していて、人に批判を受けることを気にしていました。でも、イチローさんの言う通り、つきぬけてしまえば、誰も打とうとは思わないなと思い、私もつきぬけていきたいと思うようになりました。歴史上の成功者は全員つきぬけた人たちばかりでより説得力があります。どの偉人達も、普通を捨てて、自分の好きなことを追求していてキラキラしています。

私もいつか輝けるような人になるために日々少しずつ、つきぬけていきたいです。

みんな普通じゃないから、わざわざ普通にこだわらないでほしいです。そのために周りの人に自分の個性を理解してもらったり、自分が周りの人を理解したりして、みんなの個性が輝く今を作っていきたいです。



いじめを減らす関係づくり

大塔中学校 三年 愛瀬 琉大朗

皆さんは「いじめ」についてご存じだろうか。大半の人が知っているに違いはないと思う。

近年、小中学生や高校生の間でいじめの件数が増加している。これは、私たちに深く関わる大きな問題である。

いじめの中でも生命・心身・財産に関わるものや、不登校につながる事例がある。こちらも比例して増加している。

では、どうして「いじめ」は増加しているのだろうか。

文部科学省から刊行されている「令和五年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」の分析によると、人とのつきあい方がわからず、暴力を振るったり、仲直りの方法がわからず、大人からみるとささいなことでも深く傷ついたりする子どもが増えているとある。またコロナ禍で自粛していた学校生活などが再開されて接触する機会が増えたことや、SNSな

どの使用率が上がったことも挙げられている。このような原因が「いじめ」を増加させていると言える。

私の学校では毎年「いじめ撲滅宣言」を発表する機会がある。これは、各学年がそれぞれ自分たちで話し合い、いじめをなくすための決まりを五つ決め、宣言するというものである。それを考え合う授業が先日あり、第一に「いじめ」はいつたいどういふものなのかを、ある物語を通して考え確認するということに取り組んだ。物語のあらすじを簡潔に紹介すると、テニス部のAさんとBさんがおり、Bさんがクラブ上での決まりを守らず、Aさんや他のテニス部の人がプライベートでは、Bさんにあまり関わらないようにしていた。また、Bさんは初心者であり、クラブでも雑用が主になっていた。そして、ある日からBさんが不登校気味になり、先生からAさんは、「Bさんがクラブでは雑用ばかりさせられ、プライベートでは省かれている」と伝えられる内容となっている。これらの内容に対する質問で「これはいじめであるか」という問いがあり、私は「いいえ」と答えた。しかし、いじめの定義は、「児童生徒が、一定の人間関係のある者から、心理的、物理的な攻撃を受けたことにより、精神的

な苦痛を感じているもの」であり、法律上では自分たちがどれだけ「いいえ」と言おうとも、相手が嫌がった時点でそれは、「いじめ」に該当することを知った。

この授業を通して、たくさんのことを学び「いじめ」への関心が深まった。そして、私は何より「いじめ」の区別の難しさを感じた。自分自身の思いだけではなく、相手がどう感じるかということが、その根本にあるからだ。

私は、野球部のキャプテンをしている。クラブ活動の中でも気をつけないといけない場面がたくさんある。気の抜いたプレーや、単純なミスに対して、「何しやんな!」「集中しろ!」と厳しい言葉が飛び交うことがある。この言葉も、相手の受け取り方によって、強く責められているように感じられ、深く傷つくこともある。だから、そういったプレーがあつたときは、言葉に気をつけてまず自分が注意するようにしている。また、どういう思いで注意したかを伝えたりする。そして普段から、話を重ねながら相手が、どう感じ取っているかを確かめている。小さな変化にも気づけるようでないといけない。そのために友好的な関係を気づき、キャプテンとして相談相手と

なれるようにも気をつけている。

いじめは、他者の気持ちに関わるもので、その場にいる人が、感じ取る力が大切だ。相手の気持ちに気づく力が大切である。

いじめをゼロにするのは難しいが、一人一人の意識が変わり、相手の気持ちに気づく力が高まっていけば、徐々に減っていくはずだ。世界の誰もが、楽しく過ごせるようになってほしいと私は願っている。そして、部活動の中でも、学級の中でも、気づくための関わり、関係づくりを大切にしていきたい。そうした行動は、いじめをなくすのみならず、多くの人が生きやすい世界へとつながっていくはずだ。



僕のヒーローたち

上富田中学校 二年 梅本 剛志

突然だが、あなたにヒーローはいるだろうか。そして、そのヒーローのようになりたいと思ったことはあるだろうか。僕にはヒーローがいて、その人に近づくことができるようがんばっている。

小学生のときは将来の夢なんて考えたこともなく、夢を考えるなんてまだ早いと思っていた。だが六年生の夏、僕の人生を大きく変える出来事があった。

六年生のころの六月十八日に行われた柔道の団体戦で僕は投げられ左足の大腿骨を骨折した。救急車で病院に運ばれ、大きな国立の病院に入院した。その時に医師に会ったが、まるで親友と話すように話せたことを今も激痛といっしょに覚えている。パニックでずっと体がふるえていたが、それをきっかけに落ち

つくことができた。骨を固定する手術の時も担当の医師のおかげで落ちついて手術室に向かうことができた。これから、約一ヶ月の入院生活が始まる。

僕は病棟に行った。この時が入院生活で一番驚いた。患者一人一人が想像以上に楽しそうだったのだ。答えはすぐに出た。僕がいる病棟は骨折している人しかおらずあまり大きなけがではなかったからかもしれないが、看護師の存在が一番大きいと思う。看護師は、互いの好きなことや、けがした時のことをまるで親友のようにきいてくれ、体だけでなく、心のケアもしてくれた。この病棟の良い雰囲気のおかげで、隣のベット患者と仲よくなることができ、想像以上に楽しい入院生活を送ることができた。

手術が終わってから一週間がたち、リハビリが始まった。リハビリを行う場所もとてもにぎやかで、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士の人々が患者に笑顔でよりそっている姿が見られた。とても痛いリハビリだったが僕を担当してくれた理学療

法士の方のおかげで行きたくないと思ったことはほとんどなかった。

僕は医師、看護師、理学療法士の人々のおかげで今でも柔道が続けられている。この出来事で僕は、大けがをした人の不安な心によりそいながら治療する医療関係の人々がとてもかっこいいと思うようになった。僕の足を治してくれたこの医療関係の人々が僕のヒーローだ。

僕は医療関係の人々はけがや病気を治すだけの職業ではないと考えている。草かり機で自分の足を切ったり、雨の日にすべって足が変な方向に曲がったりした人が友達だったが、そんな人達はその痛みや苦しみに対しての怒りをだれにぶつけられないのだろう。それをぶつけてもらい、少しでも患者の気持ちをやわらげてあげるのも医療関係の人々の役目なのだと思う。このことに最近気づき、この人たちを尊敬する気持ちがさらに強くなった。

僕は二回の手術をし、約半年で大好きな運動ができる体にな

ったが、この世界には「自分らしさ」を出したくても出せない人が数えきれないほどたくさんいる。戦争で足が無くなってしまった人、筋肉が固まって肘が動かなくなった人、これからこのような人をできるだけ出さないように将来は医療関係の職業に就きたいと考えている。あのヒーローたちが僕にしてくれたように、けがで苦しんでいる人に手をさしのべてあげるような人になりたい。これから立ち止まってしまうこともあるかもしれないけれど少しずつでいいのであのヒーローたちのようになるように努力していきたい。

次は僕がだれかのヒーローになれるように。



春と蝶

富田中学校 一年 湊 香乃

当たり前ですが、生き物には命があります。私がこのことを痛感したのは小学校二年生の春でした。

その時、私はおばあちゃん家にいました。春の日差しが暖かくて、綺麗な日でした。私が庭で遊んでいると一匹のアゲハチョウがひらひらと横切り、ふわふわ私の周りを飛び始めました。私は嬉しくてその蝶を追いかけて遊びました。それでも蝶は逃げることなく、穏やかに私のまわりを舞っていました。当時の私はまるで蝶とたわむれているお姫様のような気分でした。おばあちゃんもにっこりその様子をながめていました。

しばらくすると蝶もどこかへ行きたそうにはらはら飛んでいこうとしました。でも私は蝶に離れていつてほしくなくて、しつこく追いかけていきました。おばあちゃんも、

「もうええかげん離してあげよし。」

と言っていました。諦めきれずに蝶の後を追いかけていきました。すると突然私の視界から蝶が消えました。私は必死でその蝶を探しました。ふと気が付くと蝶は私の下にいて、知らず知らずのうちにそれを自分のひじで押し潰していました。

それから私は毎日蝶のことを見にいきました。幸か不幸か、私は羽の部分を押していたので、死んではいなかったのですが、もう空を飛ぶことはできなくなっていました。それでも私は、きっと大丈夫だと、テレビで起こるような奇跡が起これと、庭に落ちていた椿の花を横に置いて、水も少しかけました。おばあちゃんが、

「もうだめやと思うけどな。花の蜜飲まんのちゃう。」

と、言っていました。それでもせつせと様子を見にいていました。蝶が黒く長い口を伸ばして、花のおしべに巻きついてくれた時は本当に嬉しかったです。「ほら、奇跡、起こったじゃん。」そう思いました。

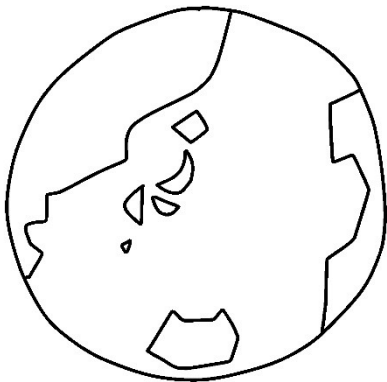
しかし、そう思ったのもつかの間、ある日蝶は動かな

くなりました。私はそれをぼう然と見つめることしかできませんでした。最後まで、飛ぶことのできなかった蝶。あの時、おばあちゃんの言うことをきいていたら。追いかけてきて迷惑だっただろうに。それでもひらひら私のそばを健気に飛んできてくれた姿を思い出すと悲しくて申し分けなくてもう戻ってこないんだなと思いました。あの春の出来事は私が生き物の命の重さを身に染みて感じたときでした。

今、生き物に関する問題に注目が集まっています。地球温暖化、森林伐採、水質汚染など、この問題の全てに人間が関わっています。よく、ニュースで耳にします。身近なところでいえば、動物園の動物のほとんどが絶滅の危機に瀕しているそうです。近くの動物園ではジャイアントパンダが有名なのですが、そのパンダも中国の野生では二千頭ほどしかないそうです。主な原因は毛皮をねらった乱獲、生息地の開発などだそうです。今、人工繁殖など保護に向けての取り組みが行われていますが、もしかしたらパンダを見られなくなる日がくるかも

しれません。

生き物の命は重いです。死んでしまったら二度と同じものには会えないし、種が絶滅してしまったら、人間の生活にも影響してきます。だから私は、人と同じくらい生き物を大切にしたいです。あの春と蝶を私は忘れないでしょう。



A Iと仲良く共存したい

田辺中学校 二年 坂本 理花

「作文を書くのが苦手だ！」

そんな人々の前に現れたのは、現代社会の進歩の象徴であろう存在、A I・人工知能だ。それらは作文嫌いにとつて、救世的的存在。作文のネタをいくつか提案してもらったり、本文の構成について相談したり、続きを書くのに行き詰まった時に助言してもらったり、なんなら、全文丸ごとA Iに書かせたりと、様々な使い方が可能だろう。

そんなにも便利なものを、もちろん私も使って、一瞬で原稿用紙数枚分を埋めよう……という考えには至らず、私は自らの頭で考え、自らの手で時間をかけて書いている。時間がどんどん削られていくため良い気分ではない。ただ、どんなに優秀なA Iが手元にあると、私は私の思想を思う存分に反映した、少々尖った作文を仕上げたいのだ。プライドが高いのだ。

私はこの作文とおし、望ましいA Iとの関わり方についての考えをまとめようと思っている。「望ましい」といっても、それはまだ私だけにとつてのことになるが、今の時代もこれからの時代も多様な場面で必要不可欠な存在であろうA Iとの良い付き合い方は、考えておくべきだ。

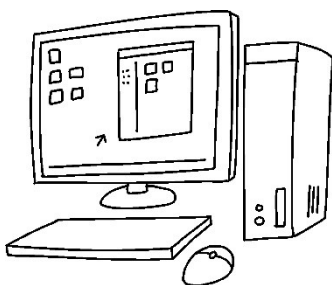
そのように思うようになったきっかけとして、「A Iイラスト」絡みの問題をSNS上で多く見かけるようになったことがあがる。私は絵を見るのが好きで、よくSNSを使ってイラストを拝見するのだが、最近はA Iが画像を生成した「A Iイラスト」を見かけることが増えた。はじめに言っておくが、私は決して「A Iイラスト」に対して否定的な訳ではない。A Iはここまで正確できれいなイラストが描けるのかと感心しているし、絵を上手く描けない人も、A Iを使うことで、イラストを作成する楽しさを知れるなら、それは素敵なことだと思う。創作を楽しむことに生きる意味さを感じている自分にとつては、自分自身の描写する能力を駆使して作られた作品も、A Iを利用し作られた作品も、どちらも価値のあるものだと思う。

ただし、それらを同等に評価することは不可能だと感じる。人間の作ったものとAIの作ったものでは、明らかにかかる労力が違うからだ。AIに出力させた作文と、今の私のように人間の頭で考えた作文の2つを例に考えてみれば、その差は一目瞭然であろう。AIイラストは特徴としてすごく綺麗だ、それは私には到底描けないほどに。でも、人が手間をかけて完成させた一枚の絵と、その一枚を完成させるまでにAIが生成した複数枚の絵だと、私は絶対に人間が描くその一枚に惹かれるだろう。一枚にこめられた重さが全く違うのだ。絵に限ったことではないが、やはり労力がかったものからは、必然的に魅力を感じてしまう。「頭で」というより「五感で」その魅力を感じ取ってしまうような。

今、SNSを見ると、そんな労力のかかったイラストがAIを疑われ、荒れてしまうといったことを目撃することがある。私はこれが許せないのだ。その疑いが、作品を楽しむことへの妨害となり、人の描くイラストはもちろん、疑いがかけられるようになったそもその原因であるAIイラスト、どちらも汚されてしまう。AIは便利だ。だけど、AIのせいで誰かが傷つくようなこと

はフィクションの中だけにしておきたいのだ。

そのためには、誰でも気軽に使える存在となったAIをどう使っていくか、真剣に考えるべきなのだ。AIは便利で優れているが、私たち人間の使い方次第で、非常に厄介で恐るべき存在と化す。それは「AIイラスト」について述べている内にしみじみ思うようになった。私は今回、AIの誘惑に負けず、自分の力でシャープペンシルを動かし続けた。それは、自分の思想を百パーセントそのまま原稿に書きたいという意思があったからだ。最後に、望ましいAIとの関わり方についてまとめたかったのだが、作文も終盤に差し掛かり、つかれているためか適当な言葉が思い浮かばない。だから私は、「望ましいAIとの関わり方」について、AIを使い、頭を整理しようと思う。それが、望ましい。



伝統や文化を守っていくには

高雄中学校 二年 山本 大智

僕は夏休みに、田辺祭の手伝いをした。その祭の数日前、会館に行って当日の詳細を聞いた。その部屋にはおかさにのせる人形など、重要なものがたくさんあった。その中でも、特に祭のアルバムが気になった。それについて、祭のことを話してくれたおじさんが、中身を見せ、いろいろ語ってくれた。アルバムの中には、十数年前の祭の様子や新聞の記事、祭についての文章など、今とかわらないものがある。おじさんたちが伝統を守ってきたから今の祭があり、和歌山の中でも特に大きな祭にまでなったのだと感じた。そして、僕には楽しむだけではなく、伝統にふれるという目的が出てきて、当日が待ちきれなくなった。

当日は、朝早くからいろいろな準備がある。友達と会館へ

向かうと、そこには大きなおかさがあった。このおかさで町をまわると思うと楽しみな反面、少し嫌になってきた。おかさは想像以上に大きい。そんな大きいものを動かすのは労力がいり、自分たちでは無理な気がする。しかし、僕たち中学生がする仕事は祭を支える人たちの飲み物や荷物を運ぶことだった。こちらも重たそうであったが、飲み物を入れるボックスはキンキンに冷えており、楽しみがよりいっそう大きな楽しみへと変わった気がした。

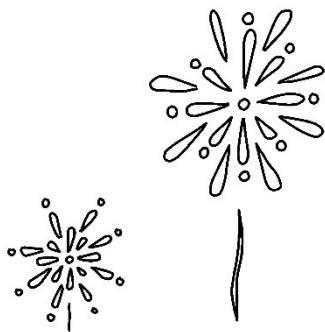
そして、いよいよおかさを動かし、町をまわり出した。炎天下の作業で、みんな汗だくになってくる。一番重たいであろうおかさを動かす二十代のお兄さんたちは、飲み物を飲みに来るたびに、「がんばれ」と応援の言葉をかけてくれた。その度に、みんながんばっているのだからがんばろうと思う気持ちになれた。それと同時に祭を動かす側の人たちの苦労や楽しみが感じられ「昔からたがいにはげまし合い、祭を支えていたのだな」と思った。

いよいよ祭はクライマックスへ。おかさは橋の上に移動して、花火がはじまる。花火は祭の終わりを告げるチャイムのように、寂しくなってきた。花火を見て、友達と楽しみ、手伝いをふり返る。このおかさは遠くから見ると、ちょうちゃんなどの明かりで輝いて見える。僕の仕事は、荷物を運ぶ仕事なので、目立つことはなかったけれど、確実に町の伝統や働くみんなにこうけんできたと思った。

手伝いをするまでは、祭を「楽しむためのイベント」だと思っていた。しかし、和歌山でも昔から続く田辺祭の裏側に実際にたってみて、「手伝う」を経験してみると、地域の人たちが協力し合って、昔から続く伝統を守ろうとしていることが分かった。誰かが屋台をまわる楽しみをおさえて、裏で準備をするなど、動いてくれることで、いつも行っていた楽しい祭ができるのだと感じた。文化を守るとは、何か特別でむずかしいことではなく、屋台をまわって楽しんでみることや、「やってみようかな」と興味をもって、祭を手伝うだけ

できると分かった。

最初は伝統を守ることは考えてもいなかったけれど、伝統を守るためには「楽しむ」ことに加えて、文化について調べたり、手伝ったりすることをずっと続けることがより大切だと分かった。だからこれから友達を手伝いにさそったり、自分も手伝いを続けたりしてみようと思う。そして、ただ単に伝統を守るだけでなく、伝統や文化は昔の人の生き方、考え方などが分かるし、今まで続いてきたことには理由があるから、そこにも注目して、理解していききたいと思った。手伝いの経験をいかし、祭の伝統だけでなく、身近な文化にも興味を持ち、調べ、守っていききたい。



さがしもの

大塔中学校 三年 刈上 桃苺

私には、よく使ってしまう言葉がある。

「どちらでもいい」という言葉だ。どちらがいいか決めなければいけない質問をされた時に「どちらでもいい」と答えてしまう。「どっちの色がいいと思う?」「どちらが好き?」どちらからか選ぶのに「どうしよう」と迷い時間がかかってしまう。そんな時、「どちらでもいい」と言うのは簡単で、とても便利な言葉だ。相手の意見を否定することもないし、難しいことも考えずにすむからだ。そして、「どちらでもいい」は「どうでもいい」という意味に似ている。物事をきちんと捉えようとしていない。しかし、私は「どうでもいい」で、済まされないことに直面した。それは、「自分の将来について」だ。

みなさんには、はつきりとした夢や目標があるだろうか。私には夢がない。「将来、やってみたいな」くらいの職業がいくつかあるが、「絶対」ではない。ぼんやりとした輪郭を持たないものばかりだ。

いくつかの「やってみたい」の中で小学生の頃から興味を持っている仕事がある。それは「パティシエ」だ。なぜかというと、私が小さい頃にケーキ屋さんに行ったとき、他のお客さんが笑顔で「ありがとう」と言っていて、人を笑顔にすることができてとてもいいなと思ったからだ。しかし、自分の中で「絶対」ではない。なりたい理由を質問されたら答えることができるが、その仕事に就くために何をしているのか質問された時に、「何もしていない」と答えるしかない。この夢でいいのか、私自身確信が持てていない部分がある。

中学生になってしつかりと自分の「将来の夢」について考えなければいけなくなった。二者面談でも、将来の夢や高校などの進路について聞かれることが多くなった。将来どんな仕事に就きたいかで行きたい高校は変わってくる。しかし、夢がしつかりしていないため、行きたい高校を決めることができない。今私には、家から近いからいいかなという理由の志望校しかない。とある高校に弓道部があり、してみたいという気持ちもあるが、部活のために無理をして学校に行くのは違うと思うし、特に学びたいことがあるわけでもない。

家族の中でも、私の進路について話すことが増えた。

「あの高校いいんじゃない」「こんな仕事をしたらいんじゃない」と言われて、「うるさいな」や、「私も悩んでいるのに簡単に言わないでよ!」とどうしても思ってしまう時がある。でも、親やおばあちゃんが私のことを思っ言ってくれていることもわかつている。でも、どうせなら行く高校も将来の目標や仕事も全て決めてくれたら悩まずに済むのにと思っってしまう。「どうせなら」、それは簡単だけど何の面白味もない。将来、例えば何か大切な二択を迫られた時に、自分では決められなくなっってしまう。

「どちらでもいい」や、「どうせなら」ではなく、物事に真剣に目を向けることが大切だ。一人で考えることが難しいならば家族などの信頼できる人と一緒に考えるのもいいと思う。真剣に向き合うことで、「物事を捉える、考える」という一連の動作が身につき、問題解決につなげることができる。「どちらでもいい」と言うことは簡単で、とても便利な言葉だ。相手を否定しないし、難しいことも考えずに済む。けれど他の誰でもない、本当の意味で、自分のことがわかるのは、私だけだ。「どちらでもいい」と決めて後悔したくない。だからこそ、「どちらでもいい」と言わないできちんと思めたい。自分のことを

大切にできないと相手のことも大切にできない。私は今できることをしたいと思う。一生懸命スポーツをする、将来の自分のために勉強を頑張るなどの当たり前のこととを、将来の自分につなげることができるようになさなことから積み上げて、「どちらでもいい」ではなく、「どうしてもしたい」と思えることに出会いたい。そして、自分のやりたいことや、夢を見つけないながら、「自分」を探していききたい。つまづくことがあっても、自分の力、自分の速さで前を向いて一歩一歩歩いて行く。どちらでもいいではなく、どうでもいいでもなく、どうせならでもなく。私はどうしてもやりたい、その気持ちに出会っていききたい。



幸せって何ですか

白浜中学校 三年 濱村 和音

幸せとは何だろうか。

遊ぶこと、美味しいものを食べることに、寝ること、家族と過ごすこと。人の数だけ様々な幸せの定義があるだろう。皆さんにとっての「幸せの定義」は何だろうか。私は、ついこの前まで、幸せの定義など考えたことが無かった。しかし、最近、私の幸せの定義が明確になった。それは、この作文を考えている時だった。その時、私は、友達と作文のテーマについて面白おかしく話し、笑いあっていた。そう、そんな友達の存在、友達といること、友達と過ごす時間、それが、私の幸せの定義なのだ。

私は、中学二年生になる時、白浜中学校に転校してきた。しかも、大阪から来たものだから、もちろん、自分の知っている

人はいないし、「友達」という存在もない。全くの真っ白な状態から新たな学校生活が始まった。自分のことを理解してくれる人が、ゼロなので友達作りは難しかった。そのため、転校してから少しの間は、友達がいなかった。しかし、今は、自分の積極的で、好奇心旺盛なところや、よく笑う性格もあつてか、たくさんのお友達がいます。転校してすぐの、友達がいなかったころ、休みの日は、家で、ただ一人ゲームなどをして遊んでいた。しかし、友達のいる今は、違う。休日は、毎日のように友達の家に遊びにいったり、友達と野球をしたりして遊んでいる。平日、学校では、絶え間なく会話を楽しんでいる。私は、昔、友達がいらないことに不自由は、あまり感じていなかった。しかし、今思えば、友達がいるほうが楽しいし、なんだか前向きになれる。明日が楽しみになる。そう、幸せなのだ。転校してきてからの日々を振り返ってみると、私は気付いた。「幸せ」というのは、幸せではない、心の中にある、何か

が足りない「不幸」の部分が埋まることで感じるものだ。例えば、自分の幸せの定義が「お金があること」である人は、お金を稼ぎ、お金持ちになることで、不足している部分が埋まり、幸せを感じることが出来る。自分の中の足りない部分、不足していると感じる部分が満たされることが幸せの定義となるのではないだろうか。

私は今「幸せ」だ。それは、友達がいるという幸せの定義が満たされているからだ。

私は、みんなにも幸せになってほしい。しかし、先ほど述べたような、お金持ちや、いい職業に就く、高学歴などだけを自分の幸せの定義にしないでほしい。それらは、いわゆる社会的な成功であり、外面的であり、目に見えるものである。社会的成功を目指し、お金だけに取っつかれないでほしい。学歴に取っつかれないでほしい。社会的成功と、幸福度は、絶対に比例しない。私は思う。本当の人生の成功とは、内面的なもの

であると。幸福度に比例するのは、私にとっては、友達の存在なのだ。人に嫌なことを言われても、嫌なことをされても、他者を、人を愛してほしい。人と関わり、友達を増やし、また、人と関わり友達を増やす。自分のことを理解してくれる「友達」を大切にしてほしい。本当の幸せとは、目に見えない、心の中のものだから。



「お母さんのありがたさ」

富田中学校 一年 横井 勇信

みなさんは、お母さんに感謝したことはあるだろうか。また、お母さんが毎日家事をやってくれるのがあたりまえだと思っではないだろうか。実際、ぼくは、そう思っている。毎日三食分のご飯を作ってくれて、毎日洗たく物を洗ってたたんでおいてくれる。そんなことをあたりまえだと思っていたぼくは、お母さんがどれだけやさしくて大切な存在かと思った出来事があった。

ある日のこと、ぼくはいつも通りゲームばかりしていた。お母さんが「宿題やりなさい。」や「ゲームばかりしていないでお手伝いしなさい。」と言った。でもぼくはかまわずゲームを続けた。そうしたらお母さんが怒って、「自分のことは自分でしなさい。」といってほとんどの家事をやらなくなった。今考えればあたりまえだろう。毎日手伝い

をしないでゲームばかりやっているから怒るに決まっている。そして、そのときの自分は、「まあ大丈夫だろう。」と思っていた。

でもそうではなかった。自分が食べた物は自分で洗い、洗たく物も自分でやる。そんなことをしていたら、時間はずっと十二時を過ぎていてほとんどねることができなくて次の日はね不足になった。

「お母さんがやっていることがこんなに大変だったなんて。」

とそのとき初めて思った。そしてこれを毎日やっている。さらに、ぼくの話聞いてくれたりする。こんなに大変なことをやってくれるお母さんは、なんてやさしいんだろうと思った。それなのに、ぼくは都合のいいときだけおねだりしたりする。そんな自分が今思うとはずかしくなる。お母さんには、感謝してもしきれない。だからぼくは、少しでもお母さんのふたんを減らせるようにがんばろうと思った。

みんなも、毎日お世話になっている人に感謝を伝えてあげよう。どんなことでもいい。ちよつとしたささいなことでも、その人はうれしいとぼくは思う。

そして、ぼくのように、毎日お手伝いをせず、だらだら過ごしている人。その人は、絶対にお母さんのお手伝いをやった方がいいとぼくは思う。今からやれとは言わないが少しでも手伝いをやった方がいいと思う。なぜなら、ぼくは、それで後悔しているからだ。

その日は、お母さんの体調が悪くてずっとねこんでいた。原因は家事のせいでね不足だったことだろう。しかも、それは一日だけではなく、しばらく続いた。ぼくは、なれないう家事に苦戦していた。ぼくは兄と姉がいたからなんとかあったが、お母さんは、これを全て一人でやっていたこと、そのせいで体調が悪くなったことを考えると罪悪感でいっぱいになったし、とても申し訳なかった。こんなことになるんだったら最初からお手伝いをしたりしていればよかったと思った。そして、お母さんが家事をやってくれる

のがあたりまえだと思っていた自分がなさけなくて、とてもはかしくなった。そして、とても後悔した。

この出来事があったから言えることだが、みんなには、ぼくのように後悔してほしくない。そのために、家のお手伝いをした方がいいとぼくは思った。そして、お母さんが家事をしてくれるのがあたりまえだと思わないでほしい。ささいなことでも感謝したらいいと思う。何度も言うがお母さんが家事をするのをあたりまえだと思わないで、お手伝いをしたらいいと思う。そして、たまには、お母さんに感謝して、何か特別なことをしてあげたらいいのではないだろうか。



「自分らしく、人とつながるために」

田辺中学校 一年 小林 蒼依

私はこの春、中学生になりました。新しい制服、新しい教室、新しい教科書。そして何より、新しい友達。小学生のときは、ずっと同じクラスの友達といっしょに過ごしてきたから、特別に気をつかったりしなくても仲良く遊べました。でも、中学校に入ってみると、いろんな小学校から来た知らない人たちが集まってきて、環境も人間関係もガラッと変わりました。「早く友達を作らなきゃ」「グループに入らないと一人になっちゃうかも」そんな気持ちが頭の中をぐるぐるして、少しあせっていました。周りの子たちが楽しそうに話しているのを見て、うらやましく思ったり、自分からは話しかけれずに誰か話しかけてくれないかなと思ったりしていました。でも、そう思っているうちに、だんだん疲れてきました。自分

らしくいられない時間が増えて、「地元の中学校に行けばよかった」と思ったこともありました。

そんなとき、小学校の友達と遊んで改めて思いました。気をつかわずに話せて、ちんもくがあっても平気で、ちよとしたことで笑い合えると。毎日いっしょにいたわけじゃないけど、安心できる存在でした。私は、そのとき初めて「友達って、ただ仲が良いだけじゃないんだ」と気づきました。

中学校では、性格も考え方もいろんな人がいて、合う人もいれば、ちよつと合わないなと感じる人もいます。人はみんな違うから、全員と同じように仲良くするのは難しいです。でも、違いがあるからこそ、新しい発見があったり、自分を見つめ直すきっかけになったりもします。

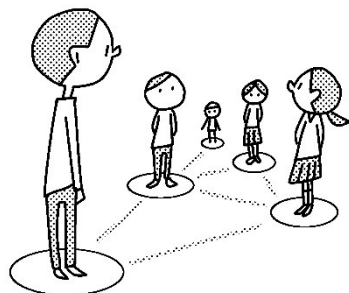
私は最近、「無理に仲良くなろうとしなくてもいい」と考えるようになりました。少しずつ話せるようになった子と自然に距離を縮めていけばいいし、あまり合わない

なと思う子とは、あいさつやちよとした会話だけでも十分だと思ったからです。大切なのは、自分の気持ちを大事にしなが、相手のことを尊重することです。そうすれば、ぶつかることがあっても、おたがいにいやな思いをせずすむと思ひます。

「みんなと仲良く」よりも、「自分らしく、つながる」そのほうが、私には合っているから。これからの学校生活、部活や行事など、いろんなことがたくさん待っています。その中で、少しずつ、自分のペースでつながれる友達を見つけていけたらいいなと思ひます。そのため、できるだけ自分から話しかけられるようになりたいです。

そしていつか、「この人とはずっとつながっていたい」と思ひたり、「この人とずっと笑ひあっていたい」と思ひたりするような大切な友達ができたらうれしいです。そのため、今はあせらず、自分らしさを忘れずに、一日を過ごしていききたいと思ひます。

そしてまたいつか、学校だけでなく社会に出てからも、いろんな人と関わる中で、自分らしくいながら、相手のこともちゃんと大切にできる人になりたいです。そのため、今の自分の気持ちを大事にしなが、自分のペースで、毎日をしていねいに過ごしていききたいと思ひます。これからもきつと、いろんな人と出会ひます。でも、どんなときでも、ちゃんとあいさつをしたり、話を聞いたり、相手の気持ちを考えられる自分になっていけるように頑張ります。



少年メッセージ2025

～西牟婁地方作文集～

発行者 西牟婁地方青少年育成
市町民会議連絡協議会

発行日 2025年9月